

---

# 古典の恋

橙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

古典の恋

### 【著者名】

橙

N3468M

### 【あらすじ】

古典の苦手な朝子は、古典の得意な小野君に、勉強を教わることになりました。

古典作品にはあまり関係ありません。

勉強と妄想による、恋のお話。

古典作品に対する理解を深め、味わい、それを通していにしえの人々に思いを馳せること。それが、あたしにはどうやら難しいらし  
い。

あたしはもともと、国語や歴史系科目より、数学とか、化学とかの方が好きだ。文系教科は答えが曖昧で、あまりにも暗記に頼るところが多い気がする。それに比べて数学は筋道も答えもしっかりとし  
ているし、解いていて気持ちがいい。化学も、整然としているから  
好き。

自分は本当に、根っからの理系人間だと思つ。

苦手な文系科目の中でも、特に古典だけはもう、どうしようもな  
い。

助動詞が、何だつて？「うんたら活用とかどうたら活用形って、全  
部覚えなきゃいけないの？」「オモムキブカイ」って結局どういいうこ  
と？「わいつざうし」って、「騒々しい」ということじゃないの？  
理解できないことばかりで、あたしは白旗を掲げるしかない。仮  
にも日本語なのに、どうして英語よりもできないんだ。古文法のテ  
キストはそつけなくて、何にも励ましてくれない。まずはあんたが  
覚えるしかないと、冷たく突き放すばかりだ。

どうしようって言つんだよー。あたしは高校に入つて早々途方にく  
れて、古典の授業についていくことを放棄した。授業中は、いそい  
そと内職に励むか、睡眠時間にあてている。結果は、素直に定期テ  
ストに跳ね返る。

でも、どうせ理系に進むつもりなんだし、それでいいと思つてい  
た。

そもそもの始まりは、職員室でともえ先生に呼び止められたことだつた。

「藤原さん、あなた古文の成績、ちょっとまずいわねえ。」

「ここにこ、ちつともまずいとは思つていなさそうな顔で、ともえ先生は言つた。

ともえ先生は、あたしのクラスの古文を担当している先生だ。おつとりとして、やさしい雰囲気をもつともえ先生は、割と人気がある。ただし、授業が眠いことでも有名だつた。

「1年の時もギリギリだつたそうね。中間も赤点だつたし……次の期末、期待できる?」

笑みを含んだやさしい声に、あたしはいたたまれなくなつて、首を縮めた。逃げ出したい気持ちでいっぱいになる。

職員室には日誌を届けに来ただけだつた。けれど用事が済んだ後に、うつかり生徒会顧問の先生につかまつて、だらだら雑談していつたのだ。やつと終わつたと思つたら、今度はこれ。早く退散していればよかつた、と後悔した。こわごわ先生の顔を見つめる。

「はあ、あの、……たぶん期待できないと思います。」

すみません、と小声で謝ると、先生はうーんとうなつて首を傾げた。

「藤原さんは理系みたいだけれどもね。……進級できないと、それも関係なくなつてしまつものねえ。」

きょととした。

「あの、あたし、そんなにひどいんですか?」

「このまま行けば、かなり危ないわね。」

「ここにこ。先生は微笑んでさらりと言つた。

さあつと、血の氣の引く思いだつた。進級に関わつてしまつほど、あたしの古典の成績はやばいのか。今までさぼつてさぼつたあたしの自業自得だけれど、留年は嫌だ。

「そんなに暗い顔しなくても、まだ一学期だし、がんばれば挽回できるわ。」

「ということで、」

ともえ先生はそこで言葉を切つて、はいこれ、とあたしに大量のプリントの束を差し出した。

「何ですか、これ……？」

「決まっているじゃない。課題よお。」

先生は口元に手をあてて、本当に嬉しそうにヒヒヒヒ笑った。あたしは全然、笑えない。手の中の紙束が、やけにずつしりと重かつた。

「それだけやれば、期末テストも大丈夫でしょう? 1年の時の範囲からカバーしてあるから、この機会に一気に総復習しちゃいなさい。大変だつたんだからね、それ作るの。」

まあ単に、1・2年のテキストをプリントアウトしただけだけど。頬に手を当てて、ともえ先生はそう言つた。そのやわらかな笑顔をまじまじと見つめて、あたしは呆然とするしかなかつた。

「こんなに?」

持つ、というよりも抱えるしかないくらい多い藁半紙の束。これを全てやれ、というのだろうか。テスト教科は古典だけではないと。いつのに? 生徒会だつて忙しいのに? 夏からそろそろ塾に通おうかなあ、なんて考えているのに?

無理です。そう勢い込んで言おうとしたあたしに、先生が先手を打つた。

「提出は絶対の義務ね。まあ、当たり前よねえ。進級がかかっているんだもの。」

のんびりと牽制されて、あたしはぐつと詰まつた。

そうです、進級。進級がここでは最重要問題だ。

ぐうの音も出ないあたしに、先生がやさしく言つた。

「さすがに一人でそれ全部、っていうのはあなたには厳しいだろうから、誰かに教えてもらいまさい。ホラ、あなたのクラスにはちょ

「うどこい子がいるじゃない。小野くんが。」

「へ、とあたしは田を丸くした。意外な名前が出たからだ。

「 小野くん、って、うちのクラスの小野くんですか？」

「 そおよよ。彼、たぶん藤原さんのクラスで一番古文が得意なんじやないかしら。居眠りも内職もしないのって、あなたのどこのじや小野くんだけだしねえ。」

笑顔でちくりと刺されてしまい、あたしはひええと肩を縮めて小さくなつた。どうやら、ともえ先生つてただおつとりしているわけではないみたいだ。この課題といい、結構容赦ない。

「 彼、いい口だし、たぶん快く教えてくれるだろうから、頼んでみなさいな。一応、こちらからも言ってみるから。」

「あの、先生は教えてくれないんですか……？」

おそるおそる、訊いてみた。先生はいい笑顔で明るく言った。

「 そんな暇ないわ。」

小野孝志くん。残念だけど、顔と名前を覚えているだけで、あたしはまだともに話したことがない。

小野くんは穏やかで優しそうな雰囲気をもつた人だ。幸い、話し掛けづらい感じではない。けれど彼はどちらかといえば、賑やかな集まりには入らず、それを周りで見ているのが好きなタイプのようだった。だから、お祭りごとが大好きでその真ん中に行きたがるあたしとは、今まであまり接点がなかつたのだ。

意外と鬼なともえ先生は、頼んでみろつて気軽に言つていたけれど。

正直すゞく頼みづらい。今まであまり関わったことのないクラスメートから、突然「進級がかかっているから勉強教えて」とか言われて、面倒がらずについいよつて言つてくれるものかな?あたしなら断るかも。

それに、ファーストコンタクトがこれつて、すゞく情けない。

けれど他にどうしようもないでの、あたしは授業後に思い切つて頼んでみることにした。

こつちはお願ひする身、嫌だとか言つてちや駄目だ。

あたしは一応、生徒会執行部の役員をやつしている。じがなヒラ執行委員だけれど。今日は、特に仕事がないから放課後は丸ごと空いていて、教えてもらつには都合が良かつた。

もちろん、小野くんの方の都合は、どうなのかわからない。彼は部活とか塾とか、やつているのだろうか。

ともかく、まずはきちんとお願ひしてみよつ。あたしは気合いを入れる意味で、前髪をとめているコンコルド・クリップをぱちんととめ直した。くちばしみたいな形のこのアクセサリーが、あたしは

好きなのだ。今日は、蝶と唐草模様のようないわものがあしらつた「ザイン」。グリーンの濃淡がきれいでお気に入り。

あたしは廊下側にある彼の席に、そつと近づいた。小野くんは文庫本を読んでいる。カバーがかけられているので、本の題名はわからなかつた。

「 小野くん、ちょっとといいかな？」

驚かさないようにしたつもりだつたけれど、小野くんは突然声をかけられて、びっくりしたようだつた。顔を上げた拍子に、ぱたんと本が閉じられる。

「 藤原さん? どうかした?」

あたしは少しほつとした。名前は、覚えてくれているみたいだ。

「 あのさ、ともえ先生から何か聞いてる?」

先生の話が通つていれば話は早い。そう期待したのだけれど、小野くんはえ、と眉根を寄せた。困惑しているように首を傾げる。

「 大江先生? 古文の? いや、特にないけど。」

ちょっと、ともえ先生!

あたしは叫びだしたい気分だつた。こつちも声をかけておくから、とか言つていたのに、全然あてにならないじゃないか。

仕方なく、あたしは自ら恥をさらして、ことの次第を小野くんに説明した。ああ、情けない。自分の古文の成績がいかに壊滅的かを話しながら、あたしはどうしても気分が沈んでいくのを止められなかつた。胸がずんと重くなつていく。

今まであまり関わりのなかつた人に、ピンチだからつて声をかけて、泣きついて。なんて格好悪いんだろう、あたしは。

「 ……それでね、小野くんが良ければ、暇な時だけでいいから勉強をみて欲しいんだ……。」

軽く自己嫌悪しつつ全部言い終わると、小野くんは拍子抜けするくらいあつたり了承してくれた。

「藤原さんが俺でいいなら、俺は全然構わないよ。」

あまりにもすんなり聞き入れてくれたので、あたしはかえつて驚いてしまった。

「えっ、本当に？でも、小野くんの予定とかは、大丈夫？」

小野くんは苦笑した。

「帰宅部で塾も行つていなし、暇な人間だから。別に今日からでもOK。」

いい人だ。あたしはほれぼれと感心した。ありがたいよ、後光がさしているよ！今なら崇めることだってできそうだ。

「本当にありがとうございます。じゃあ、早速お願ひします。先生。」

ちょっと親しみを込めてそう言つと、小野くんも微笑みを返してくれた。

図書室じゃ声は出せないし、ところとて、あたしと小野くんはそのまま教室に残つて勉強を始めたことにした。小野くんはまず、課題の中から何枚かピックアップしてあたしの前に出した。とりあえず、あたしの力がどのくらいなのかを知りたいらしい。

彼が選んだのは、助動詞の意味用法や、用言の活用の種類や活用形、それに単語の意味をきいてくるものと、あとは現代語訳の問題だつた。

たぶん基本的なものを選んでくれたんだろうけれど、あたしには十分難しかつた。頭を抱えて四苦八苦しながら問題を解いていくと、信じられないことに1時間をゆうに超えてしまった。考え込むわりに何も思いつかず、ほとんど無意味にシャープペンシルをくるくる弄つていただけだったけれど。小野くんはあたしが変な汗をかきつつプリントとにらめっこしている間、じつと辛抱強く待ってくれていた。

採点をしてみると、やっぱりひどいものだった。意味も活用も、あたしの頭の中には全く入っていないらしい。だから文章も読めな

い。何を言つてゐるのかわからない。ねえ、古典つてやつぱり外国語だよね？

あまりにもひどい結果に、あたしは机にがっくつと突つ伏した。小野くんは正解の少ない（もしくはない）プリントを見て、ちよつと困つたような顔をしていた。厄介なものを引き受けたこと、後悔しているのかもしねない。

「……まあ、これから頑張ろうか。」

小野くんが、あたしと彼自身の双方を励ますように呟つた。あたしはいたたまれずに、みじめに背を丸めた。

「なんか本当に……こんなんで」「めん。」

あれだけ時間をかけておいてこれかよ、と自分でも言いたくなるくらいだ。長いこと小野くんを待たせたのに、へ口もあたしに、小野くんはちょっと笑いかけた。

「これから覚えていけばいいよ。」

あたしは、お腹の底からため息をついてしまつた。

「その、覚えるつていうのがさ……。古典つて、やっぱり暗記科目だよね。」

ひたすら暗記するのつて、すゞく苦手だ。地歴公民もそつだけれど。でも、まだ社会科目の方がある程度役立つ知識だと思つ。古文単語はなぜ覚えなければいけないのか、あたしの中でまだ納得できる答えがないのだ。

小野くんは頷いた。

「そうだね。結構、覚えないと始まらないこといろいろがあるし。

藤原さんは、そういうの苦手?」

あたしは力なく、こくりと頷いた。小野くんは少し考えるようこのに手をあてて、凄惨な結果となつたあたしのプリント一枚、ぴらりと手に取つた。

「確かに、暗記はある程度必要だと想つけど。でも、古文はそれだけじゃないから。」

小野くんの手にあるのは、現代語訳のプリントだった。例えばこ

れだけじ、と言つて、「じゃじゃと自分のシャープペンシルを取り出す。

「古文って、今の言葉だけで考えてたら全然わからないだろ。昔の言葉の知識がないと読めない。だから暗記するんだ。暗記する知識はただの手段。一番大事なのは、その文章が何を言つているのかを読み取ることだよ。」

「……どうして、昔の文章の意味をわからなくちゃいけないの？」  
「こんな大変な思いをして。どうせ、今は使えない言葉なのに。ずっと考えてきたことだからか、ぽろつと小野くんをさらに困らせる質問をしてしまつた。そんなことを小野くんに聞いたつて、意味がないのに。すぐに、そのことに思い当たつて、内心で慌てた。だつて、今のおたしでは、どんな答えにも納得できないのは明らかだ。あたしは古典が嫌いなのだから。

小野くんは困つたように頬をかいた。

「それは俺も答えられないけど。でも、今は使わないけど、古典も言葉だから。言葉って、誰にも意味がわからずにならなかつたら、死ぬものだから。」

だから俺らが学んでいるんじゃないかつて、思つてゐる。そう言って、小野くんは少し照れくそつに笑つて、がりがり頭をかいた。  
「なんか、すごく恥ずかしいな。変なこと言つた。」

「全然、変じやないよ。」

ふるふる首を振つて否定した。おたしは感動したのだ。小野くんは古典が好きなんだな。ちゃんと考えて、理由を持つて勉強している。それつて、本当に「学んでいる」つて感じがする。

「まあ、それは置いておいて。古典の文の言つてこるところがわかるつて、結構、できると快感だよ。」

小野くんはそう言つて、プリントのあたしが書いた答案の横に、さらさら書き始めた。おたしはその手元を覗き込む。  
それは、魔法みたいだった。

「うわ。」

思わず感嘆の声を上げる。

『出家して悟りを開いたとする人は、捨てきれない気がかりなことを途中で止めて、そのまま捨てるべきである』（徒然草 第五十九段）  
『あの白く咲いている花を、夕顔と申します。花の名前は人のようだ、このような粗末な垣根に咲くのです』（源氏物語 夕顔）

つい覚えの単語を、そのまま不細工につきはぎしただけのあたしの現代語訳の横に、小野くんは流れるように自然な訳を書いていった。不自然なあたしの解答とは比べるべくもない。ちゃんと、意味のわかる言葉。小野くんはこの文の言いたいことがわかつていて、そしてあたしのような他の誰かにもわかる形に、さらりと変えることができる。あたしには思いもつかなかつた語彙を使って。わかりやすくて自然なその口語訳に、あたしはほれぼれとした。

「すこい、小野くん。　上達部みたい。」

上達部かんだいちめいというのは、貴族の中でも最も偉い人たちのことだ。さつきやつたプリントに出てきた、重要単語の一つ。つまり、小野くんはすぐ古典ができるんだね、ってことが言いたいのだ。

小野くんは一瞬きょとんとして、おかしそうに声を上げて笑った。

「何、上達部つて。藤原さんつておもしろいなあ。」

「いやー、だつて小野くんの古文力つて、平安の貴族並みだと思つよ。」

「そんなわけないだろ。」

小野くんはツボに入つたらしく、まだハハハと笑つていた。あたしは調子に乗つて、にやにやしながら言つた。

「よし、これからは『殿』とか呼ぼうかな。」

小野くんはふと笑うのをやめて、真面目な顔になつた。

「それは、嫌だな。  
もちろん、冗談です。」

## 2 (後書き)

本文中の訳は、拙い自己流です。ご注意ください…

あたしと小野くんの古典特別授業は、その後も週に2回くらいのペースで行われた。すべて、小野くんの寛大な心のおかげだ。小野くんは日程をいつもあたしの都合に合わせてくれて、嫌そなそぶり一つ見せずに、この出来の悪い生徒の面倒を見てくれる。本当、頭が下がる思いだ。

あたしはと「う」と。小野くんの優しさに応えられずに、毎回落ちこぼれぶりをさらしていた。絶望的なほど、あたしの頭の中には古典の知識が入っていないらしいのだ。何度も何度も忘れて、同じ間違いを繰り返す。それが覚える近道だつて、小野くんは言つてくれるけれど。

「……つまり、同じ推量の助動詞でも、『なり』は『音あり』で耳からの情報、『めり』は『見あり』で耳からの情報で推量する、ってことで……」

「わー、ちょっと、ちょっと待つて！」

あたしは頭を抱えた。頭の中がこんがらがつて目が回りそうだ。助動詞がぐるぐると渦をまいている。

「『なり』って、この前は完了の助動詞つてやらなかつた……？」

うん、と小野くんは頷いた。

「それとは別で、今度は推量。」

助動詞つてやつは！

あたしはがつくりと机に突つ伏した。前回のこの特別授業でも、やたらと意味の多い助動詞「む」に苦しめられたばかりだ。どうして昔の人は、こんなに面倒くさいものを使っていたのだろう。

「一度覚えちゃえば、楽だから。頑張れ。」

小野くんが励ましてくれるけれど、あたしはため息を抑えられな

い。

「あたし、理系なのにな……。」

どうしてこんなに、必死こいて古典なんかやつているんだひう。  
もちろん、今は進級がかかっているからですが。でもどうせ、あたしには必要なくなつてしまふ教科だ。

我が高校の文理選択はいつも、3年生に上がつてから行われる。  
広い知識を身に付けるため、という学校の方針らしいけれど、これは他の高校に比べると遅いらしい。だからこうして、理系志望のあたしが古典に苦しめられ、また逆に文系の人が物理化学に苦しめられるという事態が起こる。

あたしの友達に日野頬子という子がいるが、こいつは文系志望で、いつもすごく難しい応用にまで踏み込むこの学校の数学にキレている。文理は違えど、あたしと頬子に共通するのは、「 unnecessary のに！」という思いだ。

小野くんは少し口の端をゆるめ、苦笑した。

「確かに、文系の俺と理系の藤原さんじや、古文のモチベーションに差があるのは仕方ないことだけ。」

古文ってさ、高校生が一番嫌いな教科らしいね。」

「そりなんだ。」

わかるな、それ。

心からの同意をこめてあたしが頷くと、小野くんは苦笑しつつ軽く息をついた。

「そんなに嫌わなくてもいいのに。……でも、文系にも理系にも、古文嫌いな人はたくさんいるよな。単語や問題パターンをひたすら覚えるだけで、しかも何の役に立つかよくわからない教科だから。」

呟く小野くんの顔は、少し残念そうといふか、寂しそうな表情だった。

## 嫌われ者の古典。

「……でも小野くんは、古典が好きなんだよね。」

あたしがそう聞くと、小野くんは意外そうに「ひからを見つめて、それからふと笑った。

「うん。すげえ好き。」

いい顔だな、と思つた。

小野くんは古典が好きだから、古典が嫌われ者で寂しいんだろうな。

皆から面倒くさい、意味ない、必要ない！と思われている古典。あたしもそう思つてゐる一人だ。古典なんて、今回みたいに進級がかかつていなかつたら、わざわざやらないよ。

でも、小野くんは違う。必要だからってだけではなく、彼は古典が好きで、理由を持つて勉強している。

小野くんは、古典のどんなところが好きなんだろう。彼をあんな笑顔にする、古典の魅力って何なんだろう。

あたしにはまだわからない。嫌々、勉強し始めたばかりだから。小野くんの上達部には遠く及ばない。

たぶん、必要ないからって毛嫌いしていたら、近づくこともできないんだろう。

だとしたら、こうして強制的にでも古典の勉強をしてゐる今は、もう一度と来ないかもしれないくらいの、すごいチャンスなんじゃないかな？

あたし、理系志望だけど。びつせいやない、とかもう言わず

に、古典頑張るね。

気づいたら小野くんに、そう宣言していた。

「うん。」

小野くんは唐突な発言を笑つたりせずに、ひとつ頷いた。

その顔を見つめていたら、何故か無性に恥ずかしくなつて、あた

しほうつむいた。『まかすように、前髪のコンコルド・クリップをとめなおす。頬が、なんでだろ、急に熱くなつた気がする。

嫌いな古典だけれど、いつか少しさそのおもしろさがわかるようになればいい。上達部までは無理にしても、頑張つて出世して、下級役人くらいになれたらいいな。

そんなバカなことを考えて、ふと気づいた。あたしは一応、女だから、役人よりは姫なのだろうか。まさか。

やめやめ、あたしは姫なんて柄じゃない。しがない下級役人くらいがふさわしいんだ。あたしはぶんぶん頭を振つて、変な空想を追い払つた。ふうっと息をつくと、こちらを不思議そうに見ている小野くんと、目が合つた。

『毎から降り続く雨がしとしと、小さな庭の灌木を濡らしている。しめつた草と、木のにおいが鼻をかすめていく。空気が底のほうだけ少し、ひんやりと冷たかった。

梅雨の長雨、ながめ、とほんやりしていたら、かすかな砂を踏む音が聞こえではっとした。

こんな刻限に、誰が。

御簾をすかしてじつと見ると、夕闇に、黒い人影が佇んでいた。顔は見えない。けれども香りで、かの貴人がいらっしゃったのだとわかつた。

あんなところにいたら濡れてしまう。

そう思つたけれども、こちらから声をおかけしても良いのか、わかりかねた。ためらつていると、かのお方からそつとお声がかかつた。

「袖だけでなく、この身すべてが濡れてしまいました。」

この、穏やかなお声を聞くのも久しぶりだ。すつと、香りが近くなつた。

「……お会いしたくて。」

そう言つてくださつたのが嬉しくて、こちらも何かお返ししたかつた。けれど氣のきいた歌の一つでも、すぐに詠めるはずもなく。教養のないこの身が口惜しい。ひづくつまらないことしか言えなかつた。

「お風邪でも召されたら大事。すぐに拭きませんと。

ええと、タオルか何か……。」

貴人がきょとんとした。

「え、タオル?」『

はつとした。

黒板の前ではともえ先生が、のんびりと古典の教科書を朗読している。

古典の授業中。教室内の3分の1は睡眠中、もう3分の1は内職中、残りは……何をしているんだろう？あたしの席からは、全部は見えない。

授業中暇で暇で、気づいたらぼーっとして変な空想をしていたらしい。古典の授業もむやみに寝なくなつたけど（たぶん小野くんのおかげだ）、全然集中していないなあ。あたしは一人で赤くなりつつ反省して、椅子に座りなおした。

窓の外はしとしと雨が降つていて薄暗い。明るい蛍光灯に照らされた教室が、くつきりと外の風景から浮かび上がつているようだ。いつもとは違う、まるで別空間のよう。

最近は頑張つて古典を勉強しているし、資料の便覧を眺めたりして、以前よりも知識が増えたのだろう。空想できるくらいに。けれど、昔はタオルなんてなかつただろうから、それで今ははつと現実に引き戻されたのだ。あたしの知識も浅い。

古典の昔は、タオルの代わりに何を使つていたのかな。濡れたり何かこぼしたりしたときに、そういうものが必要だと思うけれど。小野くんに聞いてみようかな。困らせてしまうだろうか。

あたしの変な空想の中の、貴族はたぶん、小野くんの顔だつたと思う。

姫の方は、あまり考へていなければ、あたしではない。いくらあたしの空想でも、そこまでおこがましい、都合の良いこと考えたりしませんよ。しません、しません。

ぐるぐるシャープペンシルを手でいじりながら、今度はきちんと先生の話に注意を向けた。それにしても、この教科書の語り手は性格が悪い。「かたはらいたし」だつて。

(あとで小野くんに聞いたのだけれど、「かたはらいたし」はあたしが思つていたような、高笑いして人をバカにするような意味ではないらしい。「傍らにいるのが苦痛」つてことで、見苦しいとかきまりが悪いとか、気の毒という意味のようだ。)

雨はしづとく降り続いている。結局、授業の内容はあまり頭に入つてこなかつた。

「朝子。」

休み時間。呼ばれて振り向くと頬子だつた。片手をあげて近寄つてくる。もう片方の手には、紙パックのジューースを持つていた。

「あんた近頃、古典の授業でも爆睡しなくなつたね。成長したじやん。」

「まあ今の授業は全然、ちゃんと聞いていなかつたけどね。」

苦笑で返すと、頬子もニヤリと笑みをよこした。皮肉っぽい顔になる。

「例の古典の特別授業、うまくいつてんの?」

頬子はそう言つて、教室内をぐるりと見回した。雨がふつているせいか、いつもより人が多くてむつと湿度か高く、暑く感じる。

「小野つて、どいつだっけ?」

頬子がしつと聞いてきた。

覚えてないのか、こいつは。あたしは呆れつつ、田線で小野くんの位置を示した。彼は隣の席の子と話している。

頬子は腕を組み、首を傾けてじいつと小野くんを見つめた。ほどんど睨んでいるのと同じだ。頬子はきつめの美人だから、睨まれると迫力があつて、正直怖い。やめるとあたしが小突くと、頬子は小野くんから視線を外してこちらを見た。

「……朝子には、地味すぎるんじゃない。」

勝手なことを言つ。あたしは顔をしかめた。

「別に、小野くんは地味じゃないよ。派手じゃないだけ。」

やや的外れになつたあたしの反論に、頬子は肩をすくめただけだつた。

「古典が得意、っていうのもねえ。……根暗そりつていうか。朝子、ああいうの好みだつたっけ？」

「根暗でもないよ。」

いいじやないか、古典が得意でも。暗いなんて間違つた偏見だ。小野くんの古典が得意なことは、何らマイナスポイントではない。むしろ長所なんだ。

頬子はあまり納得いかないよう首を傾げている。確かに、小野くんは特別かっこいいわけじゃないよ。背が高いとかすぐお洒落とか、そういうわけでもない。頬子の好みには入らないのかも。でも、地味でも何でも。

「あたしには、眩しく見えるんだから仕方ない。」

ぽつんと言つと、頬子はふと笑つた。優しげな微笑みで言つ。

「……摩訶不思議。」

意地悪な奴だ。あたしは、今度は結構本氣で小突いてやつた。

頬子にからかわれるのが癪で、しかもなんとなく恥ずかしくて、あたしは机の上にまだ出してあつた便覧をごまかすように開いた。とりあえず、頬子のにやにや笑い以外のものを見たかったのだ。ぱっと開いたページには、万葉集の歌が載つていた。ますらおぶり、素朴で雄大、とか習つたやつだ。ふと、その中の一首に目が留まる。思わず、しげしげと見つめてしまつた。

大地は 取り尽くすとも 世の中の 尽くしえぬものは 恋にし  
ありけり

この歌を詠んだ人も、恋したのかな、と思った。

#### 4 (後書き)

お読みくださいありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3468m/>

---

古典の恋

2010年10月8日13時46分発行